

月歌舎・ラフタフ 番外公演台本

ミツバチの紫

——Bee Purple——

作・演出 萬野 展

登場人物

ヒデコ（久保田秀子） 踊り子。三十六歳（入月美樹）
ジュンコ（阿部純子） 踊り子。二十九歳（久保田寛子）
ルリコ（柚木瑠璃子） 踊り子。三十六歳（権田成美）
マキコ（山田真樹子） 踊り子。三十三歳（石田愛）
ロク（雪村陸郎） スタッフ。三十二歳（嶋田貴秀）
MC ショー進行役。年齢不詳。（かねこはりい）
児島伸 アルバイト。二十六歳（入月謙一）

*

須壬磐夫 不動産屋。四十一歳（小野塚老）
東郷子 司法書士。三十六歳（奥野磨記）
冴島 ルポライター。三十七歳（萬野展）

【注記】当脚本の著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

夢なんてものはね、ミスタ・ベイアード、身近にあるとあまり安全なものじゃないわ。
あたしはよく知ってる。あたしにも昔は夢があったんですもの。
喻えて言えば弾丸の入った、毛筋の引き金のついたピストルみたいなもの。
いつまでも消えない夢だったら、そのおかげで誰かがきつと怪我をする。
だけどね、いい夢だったら、それはそれだけの価値があるの。
なにせ近頃じゃ価値のある夢なんてそうたくさんはないんだから。
…人間の命の数に比べればね。

William Faulkner, An Odor of Verbena 1938

ACT 1
ムラサキ

舞台のなかに小さなステージがある。

ステージを取り囲むように椅子が置かれており、そのうち四脚に女が座っている。ステージや後方に古いピアノがあり、その前の椅子にはやはり女が座っている。女たちは動かないが、故意に客席から顔を背けているようにも見える。

ピアノの音が響く。

シヨールが始まるうとしている。

ピアノのリズムに合わせて女たちが動く。

ピアノが止み、一瞬の静寂。

大きな音とともに、MC登場

ステージ上に躍り出る。

音楽にあわせて椅子の上でポーズを変えていく女たち。

《シヨール》オープニング。

MC

…レディース・エン・ジェントルメン。本日はよつこそキャバレー・ムラサキへ…。今宵みなさまをファンタジーとノスタルジイの世界に口先ひとつでご案内するワタクシ口先案内人、またの名をクラウン、通称ステージマスターと申します。…ああ、今日はお若い方もいらっしゃる。

お嬢さん、そちらのお嬢さん、あなたのお母様はだいじょうぶですか？ 夜な夜なあなたの日記を盗み読みしたりしてはいませんか？ そしてそちらのお母さん。お気をつけてください。お嬢さんの日記に誤字脱字があっても決して赤ペンで添削したりしてはいけませんよ。ときに貴女のお父上はご健在ですか？ 夜な夜な、あのミッドウエー海戦に散った戦友が夢枕に立って、「一生真面目に働いても自分の家一軒も持てないような、そんな日本しか作れなかったのかッ！」と責められてうなされてはいませんか？

…今宵はすべてを忘れましょう。そして許しましょう。お嬢さん、お母さんを許してあげてください。お母さん、父上を理解してあげてください。そして太平洋に散った戦士たちよ、この国を、ゆるしてあげてください。今宵ムラサキに咲く、小さな四つの夢にめんじて…

ご紹介いたします。ミス・ジュンコ。

MCはジュンコに続いて、ルリコ、マキコ、ヒデコと次々に舞台上上げていく。

目立たないところに、メジャーを手にした男が登場し、あちこちを計測しはじめる。

ホール係が飲み物を持って登場。

ピアノ弾きに飲み物を渡す。

ホール係は、計測男に気づくが、他の誰も注意を払わない。

MCは女たちをひとりずつ舞台上上げる。

ホール係は、計測男を気にしながらも、ブースに飲み物を運んだりしている。

MC、ピアノ弾きも舞台にあげてしまう。
MCと女四人のパフォーマンス。

ホール係、MCに飲み物を渡す。
MCはホール係も舞台に引っ張り上げてしまう。

ホール係 え、いや、ちょっと…

女たち、ホール係の回りに集まる。

ホール係 …え、あれ、あの…

なにかをやらざるを得ないよつな雰囲気。
ホール係、迷った末やけくそでも寒い芸（または破れかぶれの滅茶苦茶な動き）をする。
ホール係が芸をしている最中に、計測男は姿を消す。

ヒデコ …ストップ。ストップ！

全員が踊りの動きをやめる。
ブースでロクが音を止め明かりを地明かりに変える。
全員がホール係を見ている。

ホール係 …。

ヒデコ なに、それ。

ホール係 え。

ヒデコ え、じゃないでしょ。

ホール係 ぼくのせい、ですか。

ヒデコ どう思う？

ホール係 …えーと…ぼくのせいかな、やっぱり。

ヒデコ うん。いい勘してるぞ。

ホール係 ありがとうございます。

ヒデコ うん。誉めてないぞ。

マキコ どうすんのよ、今のがお客さんの前だったら。

ホール係 いや、どうすんのって言われても…

ジュンコ ねえ、さっ、最初からやるの？

マキコ (唸る)

ホール係 でもですね、言い訳させてもらつたですね、いきなりなんかやれって言われても…

ルリコ ねえ、あたし、まだ遅れてる？

マキコ ごめん、見てなかった。

ルリコ なにィ…。

ジュンコ るっ、るっ、ルリちゃん、おっ、遅れてないよ。

ヒデコ ああ、ルリコちゃんよくなってるよ。

ルリコ …。(嬉しくてニヤニヤ笑つ)

マキコ ほら、ルリちゃん、またニヤニヤ笑ってるっ。

ルリコ …(顔を引き締める)

マキコ そっそう。

ジュンコ きゃっ、きゃっ、客をにらみつける。
マキコ 客をにらみつける。

ホール係 あの、もともとぼくはホール係なわけだし、バイトだし、まだ三日目だし…。

舞台にあがるなんて聞いてなかったし、あの…

ロク (ブースから) もう一回行きますかあ？

ヒデコ ちよっと待ってくれるう！…なんだっけ君。

ホール係 だから、バイトです。まだ三日目で…

ヒデコ 名前を聞いているの。

ホール係 児島です。

ヒデコ 児島くん、ホール係だろうがなんだろうが、ひとたび舞台上がったらそれは

芸人。わかる？

ホール係(児島) いや、でもですね…

ヒデコ 言い訳無用。できませんわかりませんは禁句！ 何年やってんだまったく。

児島 ですから三日目…

ヒデコ よし、わかった！ とにかく、君には特別サービスでスペシャルショーを考えよう。

児島 え…

ヒデコ (ブースに) はい今日はおしまい！ サンキュー。

ロク お疲れさん。

マキコ お疲れ！

ルリコ お疲れさまでした。

ジュンコ おっ、おっ、お疲れさまあ！

児島 え、あの…

ヒデコ、音響、照明と相談するためブースに上がっていく。

マキコ (児島のそばに来て) まあさ、この店に来たらさ、あきらめて芸を磨くことかな。…じゃ、ヨロシクね。

マキコ、退場。

ジュンコ (児島のそばに来て) だっ、だいじょうぶ、さっ、最初は誰でもそっ、そっ、そっだから。

児島 あの…

ジュンコ ……ファイトっ。

ジュンコ、退場。

ルリコ ……。

児島 ……。(目が合つ)

ルリコ (ニタニタ笑う)

児島 ……(へらへら笑う)

ルリコ、退場。

ヒデコ、ブースから降りてくる。

ヒデコ ……ふっ、ふ。

児島 あ、あの、ヒデコさん。
ヒデコ ん。

児島 気になってたんですけど、あの…、さっきの人はどういう…？
ヒデコ さっきの人ってなに？

児島 あの、さっき、店のなかを巻き尺で計ってた人がいたんですけど…
ヒデコ はあ？

児島 気がつきませんでした？

ヒデコ 全然。

児島 リハーサルの最中、ずっと、あちこち計ってましたけど。

ヒデコ 男、女？

児島 男の人ですけど。

ヒデコ 店のなかなんか計ってどつすんの。

児島 さあ…

ヒデコ 幻でも見たんじゃないの。

児島 …。

ヒデコ ま、いいや。それじゃ、楽しみにしててね。うんと素敵に演じ物考えてあげる。
じゃあね。

ヒデコ、退場。

児島、退場。

誰もいなくなった舞台に、計測男、再登場。
あちこちを計る。

計る計測男を舞台に残して、暗転。

ACT 2
瑠璃子

音楽とともに、ステージに照明が入る。
MCが登場

MC 一目出会ったその日から、恋が花咲くこともある。花の香りに誘われて、寄ってくるのはミツバチか。花は一輪、ミツバチ二匹。………どっしまじょっ。

MC退場。

《シヨール》児島扮する令嬢に、ふたりの紳士（ジュンコ、マキコ）がアタックするコミカルなもの。

だしもの 演物が終わって、一瞬の暗転後、ステージ照明ではない普通の明かりがつく。
児島、衣装のまま、疲れ切ってステージ上でのびている。
ブースからロクとヒデが降りてくる。

ロク ハイ、お疲れさん。

児島 どうも…。

ロク なかなかよかつたんじゃないの？

児島 こんなことまでやんなきゃいけないもんなんでしょつかね…。

ロク え、やなの？

児島 ええ？

ロク イヤイヤやってるように見えないけど、ホントはやなんだ。

児島 いや、あの

ロク やならやめればいいのに。

児島 いや、別にやめたいわけじゃないんです。ただ、ホラ、忙しいじゃないですか
ホールのほうも。もともと僕ホール係ってことで入ったわけで、あの、人前でな
んかやったりするのって、どっちかと言えば苦手なほうだし、それに僕の稽古で
時間とられてみんなに迷惑かけてるような気がして肩身が狭いつつ…

ロク そんなことより児島くん。

児島 はあ。

ロク 君は、なんか隠してるんじゃないのかなア。

児島 え。

ロク あ、とぼけている。

児島 いや、あの

ロク すっとぼけている。

児島 いや、僕は別に何も

ロク うすらとぼけている。

児島 あの、なんのことですか。

ロク とぼけサカムケている。(意味不明)

児島 はあ？

ロク 児島くん、ジュンコちゃんのことどっし思っ？

児島 …え、ジュンコさん、ですか？

ロク そっジュ、ジュ、ジュンコちゃん。

児島 え、どっつて…別に、どっしとも…

ロク どうとも？

児島 どうとも。

ロク そうなんだ。じゃ俺の考えすぎってこと？

児島 ええ、もう、ホントに。

ロク そっかあ、ハハハ。

児島 ハハハ。

ガシツ、と児島を捕まえるロク。

児島 ぐえ。

ロク そんなはずねえだろ！ 全部わかってんだよ、ええ！ 目が違つんだ目が。おまえが彼女を見る目はな、アカシアの木陰からひとり静かに愛しいものを見守る処女おとめのような輝きを帯びている。護まもってあげたい。そして、包んであげたい。

児島 いや、あのですね…

ロク 乾かしてあげたい、そして、畳んであげたい。

児島 洗濯物じゃないんですから。

ロク そういう君の熱い視線に気がつかないこの雪村陸郎だと思ってるの。え。どうなのっ。

児島 …ど、どうなのって言われても…。違いますよ。そんなんじゃないです。

ロク いいかね児島くん、別に僕あその萌もえたぎる性欲、はじけ散る劣情を責めているわけではないのだよ。

児島 いや、劣情って…

ロク むしる君のためを思って忠告をしようとしているのだよ、僕あ。

児島 忠告ってなんすか。

ロク あのね、この子たちはね、ダメだよ。

児島 ダメ？…ダメってなにがダメなんですか。

ロク 恋愛の対象にはならないってこと。

児島 …。

ロク、やや調子を変えてクールに。児島で遊ぶのに飽きてきたらしい。

ロク おまえ、おかしいと思わないか、この店のこと。

児島 …。

ロク この女の子たち見ててどう思うよ。

児島 どうって…仲いいし、生き生きしてるし、いいなあって思いますけどね。

ロク うん、そっだな、よし！ 君の目は立派な節穴だ！ おめでとっ！

児島 違うんですか。

ロク 違うない。

児島 じゃあ…

ロク 問題はだ、なんで彼女たちが生き生きしていられるかってことなのね。

児島 なんてそれが問題なんですか？ 生き生きしてたらいいじゃないか。

ロク いけないなんて言ってないね。

児島 じゃあ、なんなんですか。

ロク あのね、生き生きしてるってことはね、生き生きしなきゃいけない、やむにやまれぬ事情があるってことでもあるわけよ。わかるか？

ルリコ なんの音だったの。
 ジュンコ わっ、わかんない…シュツ、シュツ、シュルルツ…

ロク お湯湧かしてる音？

ルリコ 手裏剣投げてる音。

ロク なんて忍者がいんの？

マキコ 包丁研いでる音。

ロク 怖…っ

児島 あの、それってメジャーの音じゃないですか？

一同、児島を見る。

ジュンコ めっ、めっ、メジャー？

ロク メジャー？

児島 メジャーです。こっいつ、計るやつ。

マキコ 巻き尺ってこと？

児島 シュツて音がするでしょ。そんな音じゃなかったですか？

ジュンコ うーん…そう言われれば…(思い出すように考え込んでいる)

児島 ボク見たんですよ。この前リハーサルやってたとき。店のなかをあちこち計ってる男がいたんです。

マキコ なにそれ。ルリちゃん見た？

ルリコ ううん。

マキコ 店のなかなんか計ってどうするの？

児島 それはボクにも…

ロク どんなヤツなんだよ。身なりとか。

児島 普通っぽい格好でしたけど、とにかく脇目も振らずに計ってるんですよ。

ロク じゃ、なに、そいつが夜中に店んなか計測してたわけか…？

ジュンコ まっ、まっ、真夜中の…

マキコ 計測男。

ロク 変態じゃないだろうな。

マキコ 真夜中の変態計測男。

ロク ……なんか怖いぞ。

わいわいやっているなか、ルリコだけ、ぼつとなにか考えている。

マキコ どしたの、ルリちゃん。

ルリコ ん？…ううん、なんでも…

ヒデコ(普段着)、登場。

ヒデコ あれえ、まだいたの、みんな。…児島くん、その格好で帰るつもり？

児島 あ。

ヒデコ あのさ、明日の休み、もう一本新しいの作ってみようと思っただけど、みんな
 いい？

マキコ ほーい。

ジュンコ おっ、おっ、オッケー。

ロク ブースも要ります？

ヒデコ うっん、あたしただけでいいわ。

それを潮に、全員、「お疲れ」を言い合いながら、退場していく。

児島 あの、明日ぼくは…

ヒデコ 児島くん、さっきの、よかったじゃない。やっぱりやれば出来るのよ、あなた。

児島 はあ、ありがとうございます。

ヒデコ その調子。明日も頑張ってるね。

児島 あ…やっぱり。

ヒデコ じゃ、お疲れ。

児島 …あ、待ってくださいよ、ぼくも帰ります。

ヒデコ まずあんた着替えなさいよ。

ヒデコ、退場。 児島、退場。

計測男、登場。

例によって店のあちこちを計りはじめる。

ルリコ、再登場し、その様子をじっと見ている。

ルリコ (恐る恐る声をかける) あの、

計測男 …(手を止め目を上げるが無言)

見つめ合う沈黙。

計測男、目をそらして計測を続けようとする。

ルリコ あなたは誰ですかとかなにを計っているんで

計測男 …(律儀に手を止めて目を上げて聞いている)

ルリコ すかとか計ってどうするんですかとか、そんなことわたし、聞きません。

計測男 …。

ルリコ わたしも計っていいですか。

計測男 …。

ルリコ …(メジャーを出す)

計測男 …(力強く頷く)

ルリコ、計測を続ける計測男の動きに合わせて移動しつつ計測男の体のサイズを計りはじめる。

ふたりはしばし、計測に熱中する。

ルリコは計測男の全身を計り終える。

計測男 (計測を続けながら) もういいんですか。

ルリコ はい。ありがとうございます。

計測男 メモしなくてもいいんですか。

ルリコ 全部憶えましたから。

計測男 ホントに？

ルリコ はい。

計測男 右足。

ルリコ 25・7センチ。

計測男 左腕。

ルリコ 57・2センチ。

計測男 股下。
 ルリコ 71・9センチ。
 計測男 首回り。
 ルリコ 37センチジャスト。
 計測男 やあ、すごいな。
 ルリコ そんなことないです。
 計測男 …よし、と。

計測男、登場以来はじめて、計測の手を止め、メジャーをしまいこむ。
 計測男、座って休んでいる。

ルリコ あの…どうなさったんですか？

計測男 どう、とは。

ルリコ 計らないんですか。

計測男 ああ、終わりです。

ルリコ 終わり？

計測男 終わりです。…終わりだとマズいですか？

ルリコ い、いいえ…。でも、あの、え？ 全部？

計測男 はい、全部。

ルリコ この店、全部？

計測男 なにからなにまで。…まあ、こんなこと業者にやらせればいいんですけどね。なんでも自分でやらないと気が済まないですよ。

ルリコ ギョーシヤ？

計測男 凝り性なんですよ。調べるとなると徹底的にやっちゃうんですよ。高校のとき世界史が好きだったんですけど、ほら、授業ってポンポン飛ばしてくじやないですか、それがいやで、自分で教科書の最初から勉強していったんです、本とかで調べてね。そしたら、卒業するとき、先カンブリア紀の真ん中へんでした。

ルリコ 先…かんぶりあ、き？

計測男 恐竜出るとこまで行きませんでした。

ルリコ …はあ。

計測男 まあ…(店を眺め回して)やっぱり自分のものは把握しておきたいじゃないですか、細かくね。すぐ売っちゃうことになるかもしれないんだけど…。

ルリコ 売る？ 自分のものって…。あの、なんのと言ってるんですか？

計測男、謎めいた目でルリコを見ている。

ルリコ …。

計測男 胴回り。

ルリコ 84・6センチ。

計測男 (がつくり頂垂れる)…運動不足だな…。

ルリコ …あの。

計測男 これ、私の名刺です。計ってくれてどうもありがとうございます。

ルリコ あの…！

計測男 光栄でした。柚木瑠璃子さんにスリーサイズ計ってもらえるなんて。ルリコ …。

計測男 あなたの服、私好きでしたよ。

ルリコ …。

計測男 どうしてデザイナー、やめちゃったんですか？ もったいない。

ルリコ、ショックを受けて立ちすくんでいる。

計測男 いや…他人が口を挟むことじゃありませんでしたね。すみませんでした。…それじゃ。

ルリコ どうして…

計測男、足を止めて振り返る。

計測男 言ったでしょう？ 細かく調べないと気が済まないって。…それじゃ、また明日。

計測男、退場。

ルリコ、名刺を持ったまま立ちすくんでいる。

光のなか、ルリコが振り返ると、それは瑠璃子になる。

瑠璃子 …私がデザイナーをやめた原因、それはひとことと言えばジェラシーでした。飛ぶ鳥を落とす勢いの新進デザイナー柚木瑠璃子。それが二十歳のときの私でした。ある雑誌にたまたまとりあげられたのがきっかけで、マスコミにも出だし、外国に行く話もあって、凄いスピードで回るメリーゴーラウンドに乗せられたみたいに、私の周囲の世界がぐるぐる回り始めていました。

…私に才能があったのか、なかったのか、それは今でもわかりません。ただ私は服を作るのが好きだけだった。たくさんの人たちが、才能があると言って、そしてそういう人たちは決して信じてはくれませんでした。有名になったり、世の中に認められたりすることが、いいことだとちっと思えない人間もいるというのを。だから怖かったです。死ぬほど、怖かったです。男の人のジェラシーというものが、女なんか比べ物にならないほど強烈なものだということを知り、私は知らなかつたんです…。誰に助けを求めるときもできずに、わたしは結局全部のことから逃げ出してしまいました。文字通り、仕事も、生活も、全部。

それからの私は、抜け殻でした。世間という場所が怖くて、どうしようもなく怖くて、私は隠れるように暮らしていた。

キャバレー・ムラサキにいたころ、そのことを忘れていられることだけが、私の救いだった。柚木瑠璃子ではなく、ただの踊り子のルリコであることだけで、私には充分だった。そのときはそれでよかった。

でも今思えば、キャバレー・ムラサキに計測男が現れたあの日。私が数年ぶりにメジャーを握って、計測男のスリーサイズや首回りや足のサイズやなんか計ったあの日。あの日が、そのあと起こったすべての出来事のはじまりだったような気がします。

あの場所。そこはムラサキという名のキャバレー。とても不思議な場所でした…。

瑠璃子を残して、暗転。

ACT3 真紀子

稽古のためひとり早く来た児島。
郷子登場。

児島 あ。

郷子 ……(黙って軽く礼)

児島 あっ、すいません。お客さんですか。今日お休みなんですけど…

郷子 ええ、わかってます。

児島 すいません。

郷子 ……

児島 あの…

郷子 (店を見渡している)…お客が入ってないと、意外と広いのね。

児島 ああ、ですね。

郷子 最近入った人でしょ？

児島 僕ですか、ええ、はい。

郷子 この前のお嬢様の衣装、似合ってたわ。

児島 そうですか。え、ご覧になったんですか。

郷子、椅子のひとつを示して、

郷子 ここに、座ってます。来たときはいつも…

児島 そうですか、すいません、入ったばかりなんで…。常連さんなんですね。

郷子 それほどでもないわ、月に一度来るだけだもの。

児島 あ、そうなんですか。

郷子 今日は来るつもりなかったの。たまたまこっちに出てきたから。

児島 あ、そうですか。あの…遠くからいらっしゃってるんですか？

郷子 ええ、遠いわね。片道四時間くらい。

児島 え、電車で？

郷子 ええ、電車で。

児島 すごいですね。めっちゃめっちゃお得意様じゃないですか。

郷子 (少し笑う) あなたお店の人なんでしょ？

児島 はい。…あ、そうか。(深々と頭を下げる) いつもご来店、まことにありがとうございます。

…ごきます。

郷子 ねえ、ちよつとだけ、あそこに行つていい？

児島 ……あそこ？

郷子はステージを指さす。

児島 ああ、まあ、いいんじゃないですか。お得意様ですし。

郷子、ステージにあがる。

児島 (舞台側に出てくる)一緒にこんなところで人前でなにかやるなんて、生まれてはじめてだったんですよね。緊張しました。

郷子 ……

児島 でもなんていうか、ちょっとだけわかるような気がしました。なんか、舞台上
 がることの魔力っていうか、ほら、よく舞台には魔物がいるっていうじゃないで
 すか。そういうのがちょっとだけ…

郷子 そう？

児島 店の人も、みんな本当にショーが好きなんだろうなって。

郷子 あたし、お得意様なんかじゃないわ。

児島 …。

郷子 嫌いなもの。

児島 はあ。

郷子 だから確認しにくるのよ、自分がね、憎んでるもの。月に一度、電車にのって。

児島 …。

郷子 今日は帰ります。あの人によろしく言うておいて。東が来たって。

児島 アズマさん、ですか。

郷子 東郷子です。そういえばわかるから。

郷子、舞台から降りる。

児島 いや、あの。誰に伝えればいいんですか。

郷子、入り口のドアをあけつつ、

郷子 舞台の魔物によ。

郷子、退場。

ジュンコ、ヒデコ、ルリコ、ピアノにマキコ登場。

ジュンコ こっ、これでいいー？

ヒデコ オッケーよ。

児島 あの、なにをするんですかね？

ヒデコ ちょっと待ってね。

ヒデコ、うろろしながら考え込んでいる様子。

児島 …？

ルリコ (小声で) 降りてきているから。

児島 なにが…？

ルリコ、口に指を当てて「静かに」のサイン。

ヒデコ、宇宙の彼方から靈感を得ているようなポーズをしている。

ヒデコ …よし。ルリちゃん。

ルリコ はい。

ヒデコ 森の妖精。

ルリコ ようせい…。

ヒデコ 数千年の長きに渡り、人目に触れることなくひっそりと美しく咲く一輪の水仙。

ルリコ …(必死で考える)

ヒデコ 照明。深いふかい森の底。陽の光の決して届かない、霧に霞む聖域。

ジュンコ、明かりを調整しはじめる。

ヒデコ (ピアノのマキコに) 幻想的で神秘的、それでいてどこか懐かしい旋律。(児島を見て) …… キコリ。 …… よし、行くよ！

児島 …… きこり？

ヒデコ ハイ！

ヒデコ、手を打つ。

ジュンコ、明かりを調整する。なんだか青っぽくなる。

マキコ、とりあえずそれらしい音を出す。

ルリコ、妖しげな動きをはじめめる。

児島、周囲の変化を見て、慌ててキコリらしい動作をはじめめる。

妖精がキコリに近づく。キコリは木を切る。

妖精とキコリの目が合う。

キコリ (笑顔でアイサツする) …… どうもお。

ヒデコ スト——ップ！

ピアノが止む。

ヒデコ なんだ、それ。

児島 いやあ、キコリ…。

ヒデコ 「どーもお」ってなんだ、「どーもお」って。

児島 いやあ、気のいいキコリ…。

ヒデコ だめ。全然だめ。わかってない。やめ。…ジュンちゃん！ これじゃ海の底

だよ！

ジュンコ 「ごめん！

児島 でもあの…数千年も人目に触れてない森のなかなんですよね？ キコリなんかい

ますか？ それにあの…

ルリコ、口に指を当てて「静かに」のサイン。

ヒデコ、再び靈感を探っている。

ヒデコ (ピタリと止まる) アルプス！ 輝く太陽。澄み切った空気。牛の去勢に精を

出す村娘。素朴で健康的なエロティシズム。

ルリコ、必死で考えている。

あわてて照明を調整するジュンコ。

ヒデコ どこまでも青い空に溶けていく口笛の響きのような、悲しいまでに純粹無垢な

旋律！ (児島を見て) …… きこり！ …… ハイ、スタート！

なんだか昼間っぽくなる。

マキコ、とりあえず牧歌的な音を出す。

ルリコ、健康的な動きをはじめめる。

キコリは木を切る。

村娘はキコリに気がつく。

キコリと村娘の目が合う。

キコリ (笑顔でアイサツする) …… いい天気っすね。

ヒデコ スト——ップ！

ピアノが止む。

ヒデコ ……ルリちゃん。

ルリコ ハイ…。

ヒデコ それじゃ妖精とおんなじだよ。

ルリコ ……。

ヒデコ ちよっと休憩ね！

マキコ (立ち上がって) ジュンちゃん、なんか飲む？

ジュンコ おっ、おねがあい！

マキコ ちよっと待っててー！

児島 あ、俺やりましようか。

マキコ だいじょうぶ。

マキコ、退場。

ジュンコ、明かりをいじっている。

ヒデコ ……なんか元気ないね。どうしたの？

ルリコ ……。

ヒデコ なんか気になってることもある？

ルリコ ……ヒデコさん、これ…。

ルリコ、計測男の名刺を出し、ヒデコに渡す。
少し離れたところで、児島はふたりの様子を見ている。

ヒデコ ……なあに、これ？

ルリコ 計測男の名刺…。

ヒデコ ケイソクオトコ？…ああ、ジュンちゃんたちが言った、お店計ってるって

言う？

ルリコ その人、わたしのこと、知ってた…。

ヒデコ ……ルリちゃん？

ルリコ わたし…なんだかとっても…胸騒ぎがするの。

ヒデコ ……これ、なんて読むのかな…すみ？ いわお？

ルリコ その、肩書きのところ…

ヒデコ 肩書き？ ええと、…須王不動産管理サービス、代表…

マキコ、駆け込んで登場。

児島 マキさん、どうしたんです。

マキコ、舞台に倒れ込んで激しい息。

児島 マキさん！

ヒデコ ちよっと、どうしたのよ。

ヒデコ、ルリコ、寄ってくる。

ジュンコ、ブースから降りてくる。

ヒデコ ちよっとマキちゃん？

ジュンコ どう、どう、どう、どう……(どうしたの！、と言いたい)
 マキコ でっ、でっ、でっ、でっ……(出た、と言いたい)
 ジュンコ なっ、なっ、なっ、なっ……(なにが、と言いたい)
 マキコ けっ、けっ、けっ、けいっ、けいっ……(計測男が出た、と言いたい)
 ジュンコ ええいじれったい！ キリキリしゃべれ！
 マキコ 計測男が出たのよ！

計測男、メジャー片手に入り口に登場。

計測男 あのうち…。

マキコ あいつよ！

児島・ルリコ 計測男！

計測男 …いい天気つすね。

計測男、悠々と舞台へ上がってくる。

計測男 トイレ、計り忘れてたんですよね。これでホントに終わりです。昨日はどうも、ルリコさん。

ルリコ …。

マキコ 昨日って、なに？ どういうこと？

ヒデコ あんた、なんなの？ なんて店のなかなんか計ってるのよ。

計測男 ああ、ちょっと落ち着いてください。すみません、順を追って説明しますから…まずわたし、須王馨夫と申します。不動産屋です。以後お見知りおきを。マキコ 不動産？

計測男(須王) 柚木さんとは、昨日お話ししましてね。まあ、性格なんですけど、物件を右から左に流して薄利多売っていうのが性に合わないんですよね。つい、深入りしちゃうんですな。

ジュンコ なっ、なっ、なっ…

ヒデコ なんの話かさっぱりわからないわ。

ジュンコ そうよ！

須王 まあそう急がないで。すぐわかりますよ、阿部純子さん。

ジュンコ …。

須王 あなたも…。お水でも持ってきましょうか？ 山田真樹子さん。わたしあなたのソロコド一枚持ってますよ。

マキコ …。

須王 いろいろ調べました。この店のこと。面白いですね。とても面白い。でも残念なことに、経営状態は最悪です。

須王、少し黙ってためらっている。

須王 この店が毎月出している赤字。固定資産税。誰が払っていたとお思いですか？

この店のオーナーであるだけでなく、この建物全体の持ち主でもある人物…

児島 村崎さん…ですよね。

須王 ええ、今までは。でもこれからは違います。

須壬の口調はむしろ同情的に優しい。
 女たち、言葉をなくしている。
 全員、金縛りにあったように動かない。

須壬 …この際はつきり申し上げたほうがよさそうですね。村崎さんはこの店を手放されたんですよ。で、その新しい持ち主というのがこの私というわけですね。

ルリコ そんなはずない！ そんなことあるわけない！

須壬 正式な書類をお見せすることもできますが。

ルリコ デタラメ言わないでよ！ だって…だってムラサキさんは…

ヒデコ ルリちゃん。

ルリコ …。

須壬 ムラサキさんという人がどんなおつもりでこの店をやってらっしゃったのかわかりませんが、私としては、このままこのお店を続けていくわけにはいかないんです。実質的にこの店を切り回してらっしゃる久保田秀子さん、あなたにはおわかりでしょうか？

ヒデコ …ええ。

須壬 一ヶ月、差し上げます。キャバレー・ムラサキ最後の一ヶ月です。その間に経営状態が好転しない場合、この店は閉店します。そのあいだに、皆さんの身の振り方を考えるもよし。お好きに過しててください。

…とても残念です。どうぞお気を落とさずに。…失礼。

須壬、静かに退場。

児島 …ヒデコさん。

ヒデコ …。

児島 ジュンコさん。

誰も、口をきかない。

ルリコ ありえないよ。そんなことあるはずがない。みんなだってわかってるでしょう？ だって、だってオーナーは…！

ヒデコ ルリちゃん。

ルリコ …。

ヒデコ 児島くん。悪いけど、あたしただけにしてもらえるかな？

児島 ええ、でも…

ヒデコ だいじょうぶだから。…お願い。

児島 …。はい。

児島、退場。

マキコ あの人、あたしたちのこと知ってる…。

ルリコ 調べたって言ってた、全部。でもどうして？

誰も答えることはできない。

ルリコ …あの入、このお店の持ち主だって言ってた。書類もあるって…。もしそれがホントだったなら？

マキコ ホントだったならなに？

ルリコ あたしたちのうちの誰かが…！
 ヒデコ …ルリちゃん。すこしあたしに考えさせて。ね？ 今はなにも考えないで、ショーに専念して。いい？

ルリコ …。

ジュンコ …っ、っ、っ、このお店、なくなっちゃうの？ あっ、あたしたち、まだどこかに、いつ、いかなくちゃ、いつ、いつ、

ヒデコ、ジュンコをなだめる。

ヒデコ ジュンちゃん、だいじょうぶ、だいじょうぶだから。

ジュンコ …っ、っ、っ、

ヒデコ だいじょうぶ。あたしに任せて。ね？ いい？

ジュンコ あっ、あっ、あたし…

ヒデコ マキちゃん。

マキコ、ピアノに向かい、曲を弾きはじめる。

ヒデコ だいじょうぶだから。もうどこにも行かなくてもいいの。安心して。…っ、っ、っ、

マキコの弾くピアノにあわせてMC登場。

ジュンコ、ルリコ、ヒデコと、女性をひとりづつ退場させていく。

マキコとMCが残る。

マキコ、ピアノ弾き直す。

マキコ ねえMC。もしこのお店がなくなったら、みんなどうするのか。

MC、椅子に座って、ニコやかに、黙ってマキコの話聞いていく。

マキコ あたしたち、ホントにここにいていいのかな。ヒデコさんが言ってみたいに、いつまでもずっとここにいてるなんて、そんなことホントにできるのかな。

MC …。

マキコ ルリちゃんはきつとそう思ってる…。きっとジュンちゃんもね。だけどあたしは…よくわかんない。

MC …。

マキコ このお店は好き。好きだけ、キレイ。

MC …。

マキコ 大事なの。このお店も、ジュンちゃんやヒデコさんやルリちゃんも、大事。大事だから怖い。壊れるのが怖い。いつそ、なくなっちゃえばいいって思う。

MC …。

マキコ こんなこと他の子には言えないよね。MCだから言えるのかな…。

MCはマキコを見つめている。MCの相槌がマキコには聞こえているようだ。

マキコ ねえMC。もしさっきのあの人が言ったことがホントだったら…、あの人が知ってるんだよね。ムラサキさんなんて人が…、ホントはいないんだってこと…。

マキコ、立ち上がる。

マキコ　ねえMC。あの人、あたしのCD持つてるって言った。…ちょっと懐かしいな。最初で最後のCD…。

明かりの中には真紀子がいる。
MCは静かに退場。

真樹子　…ずっと、ピアノを弾いているときの顔を写真に撮られるのが嫌いでした。ちょっとした親戚の集まりでピアノを弾いて見せるとき、わたしは写真を撮られると決まって、弾くのをやめてしまう。小学校のとき、発表会やコンクールでも、友達が撮ってくれた写真、ありがとって受け取って、こっそり破いて捨てた。そのうちに、誰もわたしには写真を見せなくなった。

だってそれはお人形の顔だから。ガラス玉の目。つめたく冷えた頬。中途半端な形のまま半開きになって動かない唇。それは死んだわたしの顔。写真に写っていても、わたしはそこにいなかった。わたしはいないのに、わたしのよう形をしたものが、ピアノの前に座っている。

いつからそんなふうに思うようになったのか。ずっとわからなかった。でも写真さえ見なければ、ピアノに向かっていけば、人形になっていけば、なにもかも気にせずにいられる。それはそれで、幸せだった。

全部が変わってしまったのは、最初のCDが出ることになったときのお祝いのパーティ。身内だけの小さなそのパーティに、あの男が来た。私の最初のピアノ教師。まだ十歳にもならなかった私に、たった一年間、ピアノを教えた男。最初は誰だかわからなかった。でも思い出してしまった。その男が私にしたこと。私をピアノに向かわせて、一年間その男が私にし続けたこと。毎日、毎日、毎日…。人に見せてはいけない場所に無数についた痣^{あざ}。私は忘れていた。ずっと忘れていた。でも、痣は消えても、ずっと消えずに残っていた恐怖が、ピアノの前の私を人形にしていた。その男が、目の前でニコニコ笑っていた…。

それからあたし、弾けなくなった。ピアノが怖かった。家を離れた。誰とも会いたくない。そして結局宗教に頼った。それは小さな、まるで家族みたいな集まり。でも安心できる仲間がいる場所だった。ずっとこのままでいたいと、私はあの時も思っていた……あのことが起きるまでは。

暗転。

ACT 4 郷子

ヒデコ、音響ブース(板付き)、郷子、舞台側(板付き)。
ヒデコが曲を選んでる。いろんな曲のイントロが出る。

ヒデコ ねえ、なんか飲む？

郷子 いらないわ。

曲が決まって、ヒデコは舞台側へ。

郷子 なにこの曲…。

ヒデコ なにってなに？ 芳恵ちゃんじゃないの。

郷子 わかっているわよ。

ヒデコ ハローグッバイじゃないの。

郷子 知ってるわよ。なんなのいい歳して。

ヒデコ いいでしょ別に。好きなんだから。…で？

郷子 …。

ヒデコ あなたが開店前に来るなんて珍しいじゃない。なんなの？

郷子 こっちのセリフだわね、それ。

ヒデコ なにが？

郷子 とぼけないで。このビル、所有者変わってるじゃない。

ヒデコ …。

郷子 登記調べて来たわよ。

ヒデコ 早耳ね。

郷子 どうなってるの？

ヒデコ 気になる？

郷子 あのね、ここがどうなっても別にそんなことどうでもいいの。でももともと宗
教法人の資産だったものを、苦勞して合名会社の資産に切り替えたのはこのあ
たし。

ヒデコ …そうね。

郷子 あなたがあなたのものをどう処分しようと思っただけど、なにか一言あってもいい
と思うけど？

ヒデコ あたしのものじゃないわ。あたしたち四人のもの。

郷子 法律上はそうよ。でも実際切り回してるのは…

ヒデコ 法律のことじゃないの。本当に、ここはあたしたち四人のものなのよ。あたし
が続けたいと思ってても、そうできないこともあるってことよ。

郷子 …。あなたじゃないの？

ヒデコ …。

郷子 どういうことかわかっている？

ヒデコ たぶんね。

郷子 もしあなたじゃないなら、それができるのは他の三人しかいないのよ。

ヒデコ そうね。

郷子 誰だかわかっているの？

ヒデコ …。

郷子 そう…。とうとうあなたも年貢の納め時ってわけ？
ヒデコ …。

郷子 あたしがどう思ってるか教えてあげましようか。

ヒデコ いい気味？

郷子 その通りよ。

郷子 その話、まだ誰にもしてないわよね。

郷子 あんたに今したわ。

ヒデコ 誰にもしないでちょうだい。あたしがいつて言うまで。

郷子 …。

ヒデコ いいでしょ？

郷子 …なに考えてるの？

ロク、入店

ロク ちいっす。あ、ヒデコさん。(曲に気づく)……なんだこれ。

ヒデコ ハローグッバイじゃないの。

ロク …え…。

ヒデコ 早いわね、ずいぶん。

ロク いやあ、ちよっと、スロットでオケラになっちゃって…開店まで寝たつかなと思っ
て…あ、マズかったら他行きますよ。

郷子 もう行くわ。

ヒデコ だって。ロクちゃん、いいわよ寝て。

ロク はあ…。

郷子、退場しかける。

ヒデコ 郷子。

郷子 なに。

ヒデコ 会っていかないの。

郷子 会ったって話すことなんかないわ。

郷子、退場

ロク あの…誰すか？

ヒデコ あれ？ 知らない？ 時々ショーにきてるけど…

ロク あ、お客なんだ。

ヒデコ 古い友達よ。大学のときからの。

ロク …え。

ヒデコ なによ。

ロク ヒデコさん、大学行ってたんですか。

ヒデコ 恥ずかしいから内緒にしてちょうだい。

ロク なにやってたんですか、大学で。

ヒデコ 郷子は法律。あたしは…別になんにも。

ロク 何にもって…。

ヒデコ ロクちゃん、ここがなくなったらどうするの？

ロク え。

ヒデコ すつとぼけている。

ロク へへへ。

ヒデコ 児島くんから聞いてるんでしょ、もう。

ロク なくなるんですか？

ヒデコ どうかしらね。

ロク もったいないですね。

ヒデコ ホントにそう思ってるのぉ？

ロク わりと。

ヒデコ ふうん。

まったりするふたり。

ヒデコ ねえロクちゃん。最近ジュンコちゃんの様子どう？

ロク は？

ヒデコ なんか変わったことない？

ロク ジュンコちゃん、ですか？ いやあ、別に…

ヒデコ ちよつと気をつけてくれる？

ロク ええ？ なんですか。やだなあ、俺、スパイですか？

ヒデコ ロクちゃん、あたしいくら貸してたっけ、お金？

ロク ヤリマス。

ヒデコ お願いね。ジュンちゃんだけでいいから。

ロク …。

ヒデコ 曲変えてくれる？

ロク あっ、はい。もう、ただちに。

ヒデコ なんか文句あんの？

ヒデコ退場。

ロク、ブースに行つて、ヒデコお気に入り曲集を止め、他の曲を流す。
 児島登場し、空いたグラスを下げ、おかわりなど勤める。(ドリンクタイム)
 しばし、時が流れる。
 ジュンコがソテから顔を出す。
 働いている児島に目配せする。

ジュンコ …。

児島 …。(目があつ)

ジュンコ …！

児島 …？

ジュンコ …！！！！

児島 …。

児島、ジュンコに近づく。

児島 … ひよつとして呼んでます？

ジュンコ こっ、こっ、こっ

児島 はい、児島です。

ジュンコ おっ、お願いがあるの。

児島 なんなりと。

ジュンコ あのね、じっ、じっ、じっ
 児島 児島です。

ジュンコ 違うっ。コッ、コペーしといてほしいのよ、これ。

児島 なんですか、これ。…ムラサキ弁当…

ジュンコ (うんうん)

児島 ムラサキ弁当？

ジュンコ ひっ、ひっ、ひるっ、おっ、おっ、おみっ

児島 あ、わかった。昼間の空いた時間を使って弁当屋をやってお金を儲けてお店がなくなるのを止めよう計画ですね。

ジュンコ …………… (うん)

児島 なるほど。そういうことですか。で、これがその、

ジュンコ チッ、チラッ、チラッ

児島 チラッ、チラン。

ジュンコ マネしないでよう。

児島 すいません。

ジュンコ でもちよっと、じっ、じっ、

児島 ジンギスカン。

ジュンコ 違うっ。自信がないのっ。

児島 上手じゃないですか。このイラストけっこっいけてますよ。

ジュンコ そっ、そうかな…

児島 このへリコプターなんか感じててるし。

ジュンコ ちがう！ それミッ、ミッ、ミッ…

児島 …あ、ミサイルか！

ジュンコ ミツバチ！

児島 ……。いけてますよオ！

ジュンコ …。(ガクガクしている)

サンガラスのルリコ(スパイ風)登場。

MC、その後ろを(スパイ助手風)ついて歩く。

MCとルリコ、ジュンコと児島の会話を盗み聞く。メモを取ったりする。

(コミカルタッチに動く)

児島 あ、よかったら俺描きましようか？

ジュンコ ほっ、ホント？

児島 はい。…俺、ちよつどジュンコさんに話したいこともあったし。

ジュンコ え？

児島 いや、なんでもないです。手伝いますよ、チラシ。

ジュンコ (嬉しそうにニッコリして児島の腕をつまむ)…。

児島 はは…。ミツバチ、うん。見える。

ジュンコ じゃっ、じゃあ…お店終わったらね。

児島 はい。

ジュンコ (戻りつつ) ショー、頑張ろっね。

児島 はい。

ジュンコ、退場。

児島 ……ミツバチ、か。……………なんでミツバチ…？

2ドアから男性客(冴島)登場

児島 あ、いらっしやいませ。

冴島 あれ、えっと、新しい人？

児島 はい、そうです。

冴島 ちよつと早く来すぎちゃったんだけど…あの、マキコさんいるかな。

児島 あ、はい、たぶん奥に…

厨房(3)からマキコ、声を聞きつけて登場

児島 マキコさん、あのお客さんが…

マキコ 来たの。

冴島 うん。

マキコ なんか飲む。

冴島 飲んだほうがいいんだろっ？

マキコ いいよ、どっちでも。

冴島 じゃあジントニック。

児島 はい、ただいま。

マキコ あたしやるから。

児島 あ、いや、でもレゴさんが、踊り子さんにはなるべく接客はさせるなって言われてるんで、僕が…

マキコ ……

児島 はい。

このやりとりを遠巻きにスパイするルリコとMC。
飲み物を冴島に運んでくるマキコ。(ピアノ周辺)

冴島 ありがとう。どっ？ 調子。

マキコ 好調。

冴島 こないだの話だけど…

マキコ うん。

冴島 イヤなら無理しなくていいから。

マキコ うん。

冴島 話したくなったら話してくればいいから。

マキコ …… あたしが話せば冴島さんのお仕事がつましくいくんでしょう？

冴島 うん。

マキコ 話せるかもしれない。

冴島 どうして？

マキコ ……。

冴島 この店をやめない限り話せないって言ってなかったっけ？

マキコ 言ったよ。

そつとつな集中力で盗み聞きしているルリコ。

冴島 やめるの？

マキコ 自分からやめる勇氣はないの。でも…

冴島 でも？

マキコ なくなっちゃったら、出て行かなきゃしょうがないもの。でしょ？

冴島 …。

マキコ 結局、ここはあそこといっしょなの。あたしたち4人がいたあの場所と同じ。どんなに居心地がよくても、いつかはなくなるんだわ。

冴島 なくなっただほうがいいと思っ？

マキコ ……。ずっとあればいいと思ってた。でもあの事件が起きて、会がなくなって…

冴島 会って、ミツバチの会だね？

マキコ あたしたちも、他の人たちと同じように、世間に投げ出されると思った。でもヒデコさんが…

冴島 ヒデコさんが、ここを作ったんだね？

マキコ …。

冴島 ヒデコさんは、どうしてここを作ったの？

マキコ …。

冴島 言えない？

マキコ ごめんなさい。

冴島 いいんだよ。

マキコ おかわり。

冴島 ああ、いや、店の終わるころにまた来るよ。

マキコ …。

冴島、退場しかける。

マキコ 冴島さん。あたし、いつか話せるから。話せるよつになるから。

冴島 うん。

マキコ 話せるようになりたい。自分でもそう思っし、それで、それから、あたし冴島さんの役に立ちたいの。

冴島 うん。…じゃあ、あとで。

マキコ あとで。

冴島、退場

いったんソデに隠れていたルリコ、マキコを呼び止める。

ルリコ マキちゃん。

マキコ …。

ルリコ なにを話すの、あの人に。

マキコ …。

ルリコ なにを話したの、今まで。

マキコ ルリちゃんには関係ないよ。

ルリコ ふざけないで！

マキコ ふざけてない。

ルリコ あなたが誰とつきあおうとそんな「と」でもいい。でもこれはあたしたちみんなの問題でしょ。

マキコ …。

ルリコ あなたなんだ…

マキコ ……なんのこと。

ルリコ とほけないでよ！ この店を人手に渡せるのは、あたしたち四人のうちの誰か
しかないって、わかってるでしょ。

マキコ わかってるよ。

ルリコ ヒデコさんがそんなことするわけない。ジュンちゃんはお店つぶれないように
必死になってる。あなたしかない。

マキコ ……。

激しいやりとりを尻目に、MCはハケていく。

ルリコ どうしてなの？ どうして裏切るの？ ここやめて、外に出て、あの人と暮ら
したいならひとりですつすればいいじゃない。なんで全部壊しちゃうの？ なん
で全部ダメにしちゃうの？！

マキコ ……あたしじゃないよ。

ルリコ あんたしかないのよ……。

マキコ ……。

ルリコ あたし絶対許さない。

マキコ ……。

ルリコ、退場。

立ちつくすマキコを残し暗転。

ACT5 純子

店外。屋外のどこか。
下手に冴島と郷子。
別の場所、上手に須王とロク。

郷子 あなたが冴島さん？

冴島 冴島です。どうもすみませんわざわざ。東郷子さん。

郷子 わたしただの法律屋ですから、取材されるようなことはなにもないですけど。

冴島 まあお座りになりませんか。

郷子、冴島、座る。

冴島 電話でも申し上げましたが、取材の目的はですね、ミツバチの会という団体についてのリポなんです。

郷子 …。

ミツバチの会は、法制上は仏教系の宗教団体ということになっていました。しかし実態は特定の信仰を持たない、自己啓発と自己実現を目的とする家族的セミナーというふうなものだった。わずかな時間で全国にはびこったこの会が、数年前ある事件を起こし、その結果解散に追いやられたことはご存じの通り。ですよ？

郷子 ええ。

冴島 この団体の特徴はですね、数人の小さな単位の家族的集まりが、まるでミツバチの巣のように数を増やしていくことなんです。決してひとつにはまとまらず、それでいて網の目のように関係を保ちながら、数を増やしていく…。そのスタイルのおかげで、事件当時、教団の全体像をつかむのが非常に難しかったと、当局の関係者は言っています。

郷子 冴島さん、はつきりおっしゃっていただけます？ あなたはあたしになにをお聞きになりたいのかしら？

冴島 キャバレー・ムラサキです。

*

須王 (空を見上げて) あー、飛行機雲かなあ…

ロク …。

須王 どうですか、お店のほうは。

ロク まあまあですよ。

須王 まあまあですか。

ロク なんすか、俺に聞きたいことって？

須王 いやまあ、たいしたことじゃないんです。ちょっと気になってるだけです。みなさんはお店がなくなったらどうされるのかな、と。

ロク どうって、どうもこうもないんじゃないですかね。

須王 あなたは、どうされるんですか。

ロク さあ…。ま、ちょっと残念ではありますがね。居心地は悪くなかったから。でしようね。

ロク ねえ須王さん、ひとつ聞いてもいいですか。

須王 はい。

ロク ムラサキさんなんて人は、いないんですよね？

須王 …。

ロク あの店を作ったのは、じゃあ、誰ですか？

*

冴島 あなたは、キャバレー・ムラサキにいる久保田秀子とお知り合いですね。

郷子 ええ。

冴島 キャバレー・ムラサキは、ヒデコさんが中心になって、かつてムラサキの会に所属していた四人の女性たちが作った。そうですね。

郷子 そうだとしたらなにかしら？

冴島 東さん。僕は事実を知りたいだけなんです。

*

須王 おっしゃるとおり、ムラサキというのは人の名前じゃないんです。ヒデコさんやルリコさんたちが合同で運営している合名会社という事です。

ロク でもいまはあなたのだ。

須王 そう。私の。

ロク 誰が売ったんです、あの店を。

須王 …。

*

冴島 あのビルは、ムラサキの会の持つ膨大な資産のうちのひとつだったはずですが事件後、ムラサキという名前の合名会社の持ち物となっている。手続きを担当したのはあなたですね。

郷子 すべて合法的な手続きですよ。ずいぶん詳しく調べたみたいだからわかるでしょうけど、あなたのおっしゃっていることは、誰でも調べればわかることです。

冴島 その通りです。

郷子 じゃあ本当はなにがお知りになりたいのかしら？

*

ロク まあ誰でもいまさら関係ないですけどね。…幻のオーナーか、しかし見事にだまされたもんだ。

須王 そうですなあ。

ロク ずっと信じこんでましたからね。だけど、なんでそんなことしなきゃいけなかったんですかね。

須王 まあ、隠しておきたかったんでしょ。あんな事件があった後で…

ロク あんな事件？

須王 ご存じないですか？ あの人たちはみんな、ミツバチの会にいたんですよ。

*

児島 宗教法人が強制的に解散した場合、その法人が所有していた資産は、通常の場合、法人の代表者の個人所有に帰せられる。あつてますか？

郷子 ええ。

児島 しかしあの事件で、法人の代表であった教祖片桐虹彩は亡くなってしまった。資産は当然遺族のものになる…。あつてますか？

郷子 …。

児島 あつてますね。実際、教団の財産のほとんどすべては、引き取り手がなく、競売に出され、散り散りになった…。ムラサキという名の小さなお店以外は。

*

ロク ミツバチの会…つて、あの、集団自殺の…

須壬 ええ、宗教的理由による二十八人の自殺者を出して、強制解散させられた、あの団体です。

*

児島 それが可能だったということは…東さん、キャバレー・ムラサキを所有していた四人のなかに、片桐教祖の遺族がいるはずだということなんです。僕の探しているのは、その人物なんです。

児島、郷子、ロク、須壬、退場。

ムラサキ店内。

児島、登場。

人を待っている様子。

ジュンコ登場。後ろからそっと近づく。

児島の耳を塞ぐ。

児島 …普通目隠ししませんか？

ジュンコ バツ、バツ、バツ

児島 よく聞こえないんですけど。

ジュンコ (耳から手を離して) バリエーション。

児島 あ、聞こえました。

ジュンコ (児島の隣に座る) 児島くん、イッ、イッ、イラスト、ありがとね。

児島 あんなんでよかったですか？

ジュンコ …(OKサインをだす) すっ、すっ、い、い、じょうず。

児島 よかった。

ジュンコ …。

児島 …。

ジュンコ …はっ、(話つてなに？ と言おうとした)

児島 あのっ、(かぶる) あ…

ジュンコ …。はっ、話つて…なっ、なっ、

児島 ジュンコさん、ひとつ聞きたいことがあるんですけど…。

ジュンコ なっ、なっ、なっ、(あがっている)

児島 あの…無理してしゃべらなくてください。ぼくが勝手にしゃべりますから、返事だけしてくれれば…。

ジュンコ … (首を縦に振る)

児島 片桐っていつ名前に覚えはありませんか？

ジュンコ ……？

児島 片桐虹彩こうさいです。こうさいは虹に彩るって書くんです。

ジュンコ …。

児島 知っていますか？…いや、覚えていますか？ 何年前、ある新興宗教の教祖だった人なんです。今はもう解散しちゃってるんですが…。

ジュンコ …。

児島 ジュンコさん、ぼくね、嘘つくのが苦手なんです。ここに来て身に沁みました。だから、もう正直に言っちゃいます…。ぼく、最初からジュンコさんがここにいてることを知ってて、それでここに来たんです。

ジュンコ …。

児島 探偵なんてかつこいいもんじゃないけど…なんでも屋っていつのかな。…あなたの居場所、今どうしているか、あなたの行方がわからなくなってから、どこでどうやって過ごしてきたのか…。それを調べるように、頼まれたんです。

ジュンコ …。(相変わらず動かない。児島を見ることもしない)

児島 片桐虹彩は、たくさん信者といっしょに、自殺してしまって、その宗教団体はなくなってしまった。現世からの解脱とか解放とか、難しいことは僕にはわかりませんが、片桐虹彩っていつ名前は、教祖が受け継いでいく名前だったそうです。死んでしまった教祖の本名は、阿部信彦…たぶん、あなたの…

ジュンコ、俯いている。
体が、細かくふるえている。

児島 ジュンコさん…。

児島、そうっと近寄って、ジュンコの肩に触れる。

ジュンコ、感電したように体をふるわせて、猛烈に暴れ出す。

児島、慌ててそれを抑えようとする。

ジュンコ ああつ、あああつ、ああつ、ああつ…！

ジュンコ、児島を突き飛ばし、ステージの床を這い擦ってなにもものから逃げようとする。
顔には恐怖が貼りついている。

ジュンコ ああつ、あつ、ああつ…！

児島、おきあがって(ピカピカに)ぶつけたらしく顔を押しさえている。ジュンコを追い、力づくで抱きすくめる。

ジュンコ あああああ…ああつ…！

児島 ジュンコさん…！ ジュンコさん…！ だいじょうぶです…。なにも…なにもしない。
ない。

ジュンコ、児島の腕の中で暴れる。

児島、パニックに陥った獣を宥めるように、唇を鳴らし、囁き続ける。

児島 シーッ…だいじょうぶ…なにも…心配ないから…誰も…なにもしないから…

児島 純子さん、もういいんだ。
純子 思い出した…。私だけが…生き残ったんだ……
暗転。

ACT 6 秀子

舞台上にヒデコ、ルリコ、マキコ登場。ジュンコをかこむ。
MC登場。
客席側に郷子。

MC さよならだけが人生ならば、またくる春はなんだろう。花に風の喻えもあるが、花は風に耐えかねて、落とした種はどこへ行く。

MC、操り人形のように、ジュンコに息を吹き込み、ジュンコを動かして椅子に座らせる。

MC みなさま本日もうこそキャバレー・ムラサキへ。残念ながらからお別れの時間がやってきました。一步外に踏み出せば空にはひとかけらの冬の星、はたまた街路樹を揺する木枯らしか。家路を急ぐみなさまの、心にひとひらの花びらを…。

MC、優雅に一礼し、唐突に退場。
明かりが変わる。

舞台上椅子に座ったジュンコは、見たこともない穏やかな目をして微笑んでいる。

マキコ ジュンちゃん。

ルリコ そう…思い出したのね…

かすかに頷くジュンコ。

ヒデコ ルリちゃん、マキちゃん、ごめんね。あたしたち、さよならしなきゃだめ。

ルリコ …。

ヒデコ 最初から思ってた。彼女があのことを思い出す時が来たら、それがショーの終わりだって。

ルリコ ここを売ったのは…

ヒデコ (頷く)…郷子。

郷子、舞台側へ。

ヒデコ あなたにこの最後の整理を任せたいの。不動産は人手に渡ったけど、中のがらくたは、処分しないとな。お願いしていい？

郷子 …仕事なら受けるわよ。

ヒデコ ここでお店をやれたのはあなたのおかげ。本当に、感謝してる。こんな終わり方で悪いと思うけど…しかたなかったの。

郷子 いいわけはいいわよ。仕事なんだから。

ヒデコ ええ、信頼してるわ。

ルリコ ヒデコさん…

ヒデコ ありがとうルリちゃん。あなたのおかげよ。とても…楽しかった。

ルリコ あたし…絶対、もどってくるから。もういちど、ショーやるんだから…

ヒデコ フリが遅れたら遠慮なくダメ出しするわよ。

ルリコ …うん。

ルリコ、退場しかけてマキコと田をあわせる。

ルリコ マキちゃん…

マキコ うん。

ルリコ ゴメン。

マキコ あやまらなくていい。あたし、ホントは「こつなるって知ってたから。いつかこつなるって…わかってたから。」

ルリコ あんたのそついうとこ、キライ。

マキコ …。

ルリコ、マキコに笑いかけ、ジュンコに目をやり、なにも言わずに退場。

ヒデコ マキちゃん。

マキコ 言わないで。

ヒデコ だめ、言うわ。

マキコ …。

ヒデコ ピアノ、やめちゃだめよ。

マキコ …。

マキコ、同じく退場。

ヒデコ、ジュンコ、郷子が残っている。

ヒデコ、舞台を離れ、ブースへ。

郷子 どこいくのよ。

ヒデコ 音楽変えるだけよ。なんか飲む？

郷子 いらない。

ジュンコ ……あたし…

郷子 …なに？

ジュンコ 生きてるんだ。

郷子 そつよ。あなたはね、生き残ったの。だから生きて行かなきゃだめ。

ジュンコ お父さんも、みんな、死んじゃったんだ…

郷子 …。

ジュンコ あたし、ここから外にでて、いいの…？

郷子 たぶんね。あの人がそついうふうにし向けたんなら、だいじょうぶよ。

ジュンコ …。

郷子 腹の立つ人だけど、そついうとこ妙に鋭いのよ。バカ特有の勘の良さね。

郷子、笑顔を見せる。ジュンコつられて笑う。

郷子 だからたぶん、あなたはだいじょうぶ。辛いことでも、思い出したらめとめまう、その思いとつしよに生きていくしかないんだから。辛くなくなるまでね。

ジュンコ …。また踊れるかな…

郷子 やめなさいよ、こんな浮ついた仕事。

ジュンコ だって…好きだもん。

郷子 しょうがないわね。ろくなことになんないから早めに切り上げときなさいよ。

ヒデコ、戻ってくる。
飲み物を郷子に渡す。

ヒデコ あんた、なに余計なこと言ってるの？

郷子 まっとうな生き方を教えてあげてんのよ。

ヒデコ ジュンちゃん。

ジュンコ …うん。

ジュンコ …(頷く)

郷子 あたし行くわよ。

ヒデコ 会っていかないの？

郷子 話すことないって言ってるでしょ。

ヒデコ はいはい。

郷子 伝えておいて。どこの舞台に立とうと勝手だけど……連絡だけは入れなさいって。
ヒデコ …(ただ頷く)

郷子、退場

ジュンコ …伝えるって…誰に？

ヒデコ あら？ 知らなかった？ 東さんよ。

ジュンコ アズマ？

ヒデコ そう。あの人の旦那によ。

ジュンコ アズマなんて人、いた？

ヒデコ 何言ってるの、ずっといるじゃないの。白塗りで。

ジュンコ …。

ヒデコ さ。ジュンちゃん。ここはもう閉めるわ。児島くんが、外で待ってるわ。

ジュンコ …ヒデコさん。

ヒデコ さよなら。

ジュンコ ……護ってくれて…ありがとうございます。

ヒデコ 行きなさい。

ジュンコ、退場

冴島、登場

ヒデコ 児島くんを雇ったのは、あなたね、冴島さん。

冴島 はい。

ヒデコ いつか誰かが探しに来ると思ってたわ。…でも、あなたでよかったみたい。

冴島 あなたの考え通りに動いた、ってことですか。

ヒデコ おおむねは。でも計算外のこともあったけど？

冴島 はい。

ヒデコ マキちゃんはいいい子よ。

冴島 …。僕にも予想外だったことがひとつありました。

ヒデコ そっ？

冴島 ミツバチの会のことや、片桐教祖のこと、調べているうちに、確信したことがあるんです。

ヒデコ どんなこと？

冴島 ミツバチの会を作ったのは、あなただということです。

ヒデコ ……

冴島 ずっと、考えていました。片桐虹彩こと阿部信彦は、ミツバチの会を作ったのではなく、すでにあったその仕組みに入り、組織を拡大し、教祖を名乗った。だからどこかにあったはずなんです、全国に拡散したミツバチの巣の、最初のひとつが。

ヒデコ ……

冴島 柚木瑠璃子、山田真紀子、そして教祖の娘、阿部純子。あの三人はあなたの最初の子供たちだった。暴走し自滅した教団の後始末をするために、あなたは彼女たちを…いや、教祖である父親に逆らえずに集団自殺行為に参加し、記憶をなくした。たったひとり生き残った阿部純子を、護ろうとした…。

ヒデコ あなた、書くんでしょう？

冴島 できれば。

ヒデコ いいわよ。書いてちょうだい。あなたの思う通りに。そしてね、意味をみつけて。それはたぶん私にはできないことだから。

冴島 なぜ？

ヒデコ 振り返るのは苦手。もう少しだけ、前に進みたいから。

冴島 ……

ヒデコ ……マキちゃんのこと、大事にしてあげて。

冴島 はい。

冴島、退場
須王、登場

須王 終わりましたね。

ヒデコ そうね。あなたのおかげ。

須王 わたしはあなたの言われた通りにやっただけですから。

ヒデコ あなたが店にあらわれてからちょうどひと月…。

須王 予想通りですか？

ヒデコ 良くも悪くも、ね。

須王 ひとつ聞いてもいいでしょうか？

ヒデコ ええ。

須王 これから…どうされるんです？

ヒデコがゆっくりと須王を振り返る。それは秀子である。

秀子 ……沖縄にね、おばあちゃんがいるんです。たったひとりの肉親です。八十歳で、ピンピンして、浜辺で海草なんか拾って暮らしてるの。ずいぶん会ってないけれど、たぶん今でも元気だと思っ。

子供の頃は、できないことなんてなんにもないと思ってました。自由で、どこまで行って行けて、なんだってできる。大きな麦わら帽子をかぶって男の子みたいに泥だらけになって、男の子といっしょになって駆け回っていました。沖縄には基地があるでしょう？ そのころは学生運動が盛んで、いろんな人が島に来て…私が十七歳のとき、そういう相手と恋をした。(おかしそくに、また懐かしそくに笑っ)目が鋭くて、頭は空っぽってタイプよ…。でも、私を広い世界に連れ出してくれると思った。

大学に入って東京に出てきて、全部が変わってしまった。目つきが鋭いだけの男と別れて、また別の男とつきあつて…どんどん疲れて…わたしは、どんどん平凡な女になっていった。変えたかったの。ただ変えたかった。裏返したかった。力を取り戻したかった。そしてある日わたしは突然走り出した、まっすぐに。ただまっすぐに。

政治も宗教も本当はどうでもよかった。人を救うことなんて、考えもしなかった。時代も世代もわたしには関係ない遠い空の上の出来事。狭い島がいやで、広い場所がほしくて飛び出して、でもそれは間違っていた。ただ私はわたしのまわりを、自分のいる場所を、わたしだけの島にしたかった。

あるジャズマンが言っていたわ。「好きなことをしていない人間の顔はゆがんでいる」。でもそれだけじゃイヤだ。それだけじゃ足りない。好きなことなんかじゃない。居心地のいい場所なんかいらぬ。大事なことは、いちばん大事なことは、…それはなにも恐れないこと。それは一番危険で、甘い香りのする夢…

須王 ミツバチの会で、本当に救われた人もいますよ。私のように…

秀子 でも結局は元の黙阿弥でした。これで全部綺麗サッパリ…。

須王 こうして最後までやり遂げたじゃないですか。

秀子 あの子たちだけは…なんとかしてあげたかった…。あのまま放り出さなくなかった…。あの子たちが世間に戻っていく前に、最初の状態に戻ってしまう前に、ここが…この場所が必要だった…。

須王 …。

秀子 一度帰ります。あそこに。それからもう一度、帰ってきます。いつか。いつかきつとここに帰ってこようと思つています。…それまで(須王を見る)

須王 (頷いて)…それまで…

秀子 それまでどうぞ、お元気で。

須王 あなたこそ、どうぞお元気で。…片桐虹彩…いいえ、片桐秀子さん。

秀子、退場。
暗転。

ACT7
ラストショー

人気がないキャバレー・ムラサキ。
郷子、登場。
誰もいないステージ。

郷子、店内を眺める。
ピアノの蓋をあけ、鍵盤を叩く。
答えはない。

郷子、店を出ようと歩き出す。

音楽が聞こえる。
郷子の足が止まる。
明かりがゆっくり変化し、女たちが登場する。
ブースにはロクがいる。
児島が飲み物を載せたトレイを持って歩く。
音楽が始まり、MCが飛び出す。

最後のショーが始まる。

郷子はそれを見ている。

音楽が静かなものへと変わっていく。

幕。